

J **apanese text**

2010年 秋/冬号 日本語編

ホテル

篠田桃紅の書、再び

——新生「ザ・キャピトルホテル 東急」が
伝える和の心

撮影＝坂田栄一郎 文＝編集部

p.058

新しく生まれ変わったホテルのための作品に、篠田桃紅さんは「豊」の形を描いた。50年前にホテルの開業時に描いた作品と対をなす。世界の人々を迎え安らぎを提供するホテルのもてなしの心であり、また世界に対する祈りでもある。

(p.058 右上)

篠田桃紅(しのだ・とうこう)

美術家。1913年生まれ。

抽象表現主義絵画の影響を受け、書道の枠を超えた新しい墨の表現を追究。ミニマルな抽象表現で、唯一無二の孤高の世界を描き続けている。

(下左)

ホテル創業時に描いた篠田さんの作品『無題』。金箔に墨で描かれ凍と化した緊張感と共に、墨の奥行きを感じさせる。旧ホテルではスイートルームに飾られていた。

(下右)

上・篠田さんの所有する中国・明時代の墨。いつか使いたいと思っている。

下・墨をする過程も作品の一部。

作品に込められた新しい時代の「豊かさ」

p.061

本誌巻頭の作品とエッセイは創刊以来、篠田桃紅さんをお願いしている。いうまでもなく、篠田さんの作品は「書」という伝統の形を取りつつ、伝統の枠を超えた筆によるアブストラクトアートとして世界の人々の共感を得ている。97歳になる今も精力的に表現の幅を広げ、常に最前衛の姿勢を崩さない。その自由さと普遍性に私たちは深い共感を覚えるのである。

1966年、ビートルズが来日した折に宿泊した東京ヒルトンホテルのスイートルーム(後にビートルズルームと呼ばれ

る)に、篠田桃紅さんの作品がかかっていた。東京ヒルトンホテルとして開業した当時に、ホテルから依頼されて描いた作品である。金箔の地に大きな筆を大胆に走らせたその作品にメンバーは興味を持った。「この作品は何によって描かれたのか?」

ホテルの支配人から問い合わせの連絡を受けた篠田氏は、「面白いことに興味を持つなと思いました。作品が若い彼らの感性にこたえたのでしょうか」と、当時を振り返る。筆の店の場所をきいたビートルズの面々は筆を求めて店に足を運んだという。

ホテルはその後、1984年にキャピトル東急ホテルとして引き継がれるが、このビートルズにはじまり、このホテルを好んだ海外のVIPは枚挙に暇がない。

それは日本に求められる日本的なホスピタリティというものホテルが備えていたからである。ホテルの立地がもともと陶芸家・北大路魯山人が美食倶楽部「星岡茶寮」を主宰し、人々をもてなしていた地。日枝神社という緑豊かな鎮守の森に隣接し、ロビーには蒔絵の柱、吉田五十八(いそや)による日本庭園と数寄屋造りの料亭「源氏」など日本の国際性を強く意識した建築。

そのキャピトル東急ホテルが今年の秋、4年ぶりにまったく新たな装いを伴って「ザ・キャピトルホテル 東急」としてオープンする。10階建ての建物から29階建ての複合高層タワーへ。黎明期の国際ホテルとして海外から数々のVIPを迎えてきたその歴史と精神を引き継ぎ、外国人客をもてなす新しい現代の和の形を徹底的に追求している。

今回の建築は隈研吾氏。隈氏が得意とする木の縦格子(ルーバー)がここではさらなる変形を伴って展開されている。光や風や湿度を緩やかに調整する格子戸や障子のように、このホテルの空間にも微かな呼吸を感じられるのだ。

フロントに古い篠田氏の作品と向かい合う形で新しい作品『豊』が設置された。

「昔の中国の“豊”の意味を表現している形です。昔の絵文字ですね。たとえば実りの豊かさ、日本を外国の人が見て豊かに思う。万人にとって共通のいいことはそうない。豊

はその一つです」と篠田氏。

新生ホテルがここを訪れる賓客を通して新しい時代の「豊」を世界に発信していくことに期待したい。

左ページ・作品『豊』。プラチナ箔の画面の片隅に漆で描かれているのは、豊を意味する中国の象形文字。

上・自宅アトリエでの篠田さん。

下左・新しくできた日本料理「水簾(すいれん)」に掛けられた篠田さんの作品「桐壺」。

下右・ホテルエントランス。木のルーバーがガラスに映り込み、森の連なりを連想させる。

(p.062)

左上・ロビーフロア

左下・ロビーフロアに接する水のランドスケープ

右上・客室。手前はバスルーム

右下・ロビー天井のひと際目を引くデコレーション

■ ザ・キャピトルホテル 東急

東京都千代田区永田町 2-10-3

Tel. 03-3503-0109 Fax. 03-3503-0309

www.capitolhoteltokyo.com/en

*2010年10月22日オープン